



# 岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

韓国語を母語とする学習者に対する発音指導：  
評価札を用いて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, かな メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/3386">http://hdl.handle.net/20.500.12099/3386</a>

# 韓国語を母語とする学習者に対する発音指導

— 評価札を用いて —

伊 藤 かな

## 要旨

相手に自分の意見を分かりやすく伝える上で、発音は大変重要な要素となっているが、発音指導、特に発話の自然さにつながるイントネーションを中心とした指導はまだそれほど多く行われていない。しかし近年、体系的な韻律指導のための研究が行われつつある。本稿では、そのような研究をもとに、イントネーション指導を中心とするシラバスをたて、評価札を用いた授業内容を報告する。学習者の発音に対し、評価札を用いることによって、学習者はさまざまな方略を用いて、自分の中で発音基準を作ろうとする。本稿ではその方略も報告する。そして、発音指導において教師にはどのような役割を求められるのか、また今後の発音指導のためにはどうすべきか、提案していく。

## 1. はじめに

日本語教育において、発音指導に向けられる時間は比較的少ない。谷口（1991）が国内の日本語教師 158 名に行ったアンケートによれば、発音指導は「時間がない」ため、「会話中に気づいた発音の誤りをその都度訂正する」程度だという。しかし、相手に自分の意見を正確に、分かりやすく伝える上で、発音は重要な要素となっている（三浦・深澤 1998, 小寺・野原・袴田 2001）。

日本語学習者にとっても発音指導はニーズの高いものとなっている。小河原（1998）が都内 112 名の学習者に行った調査によると、これから学習したいことは「話す」（75.9%）ことであり、その中でも「自然な発音・イントネーションで話す」（48.2%）ことが最も高くなっている。

筆者は、岐阜大学で 2000 年の 11 月から 2 月にかけて、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、発音指導を含めた口頭表現の授業を担当した。発音指導といっても、単音、プロミネンス、アクセント、イントネーション、リズムなどが考えられるが、学習者に対し指導すべきものは何であろうか。

小河原（2001:66）は、「日本人が学習者の音声的特徴の中で、具体的にどのような要素を高く、あるいは低く評価するのかといった日本人評価の実態を調査研究することが、発音指導のシラバスをたてる上で重要なアプローチとなる」と述べている。そして、このような背景からすでにいくつかの評価研究が進められている。以下、それらの研究を挙げる。

関（1989）は、韓国語を母語とする日本語学習者 3 名に、物語（桃太郎）を朗読してもらい、その音声を日本語母語話者 10 名に聞かせた。そして、発音の不自然さがアクセント、イントネーション、リズム、単音発音のうち、何に最も起因しているかを評定してもらった。その結果、全体の発話の不自然さの主な原因とされたのは、イントネーションであった。

大山・三浦（1990）は、英語話者、仏語話者が発話した日本語の単音、基本周波数、強度、継続時間を日本人のものに入れ替え、どれが「日本語らしさ」に貢献しているかを調べた。その結果、母国語の違いにより多少異なるものの、継続時間と基本周波数が「日本語らしさ」に貢献すること

が分かった。つまり、「高さ」と「長さ」が重要であった。

佐藤（1995）は、中国語話者と韓国語話者、そして日本人の東京語話者に実験文を読ませ、そこから高さ・長さ・強さの3つの韻律的要素を抽出し、日本人と外国人の韻律的要素をさまざまに入れ替えた合成音声を作成した。どの韻律的要素が評価に大きな影響を与えるか、そして単音と韻律のどちらが評価に与える影響力が大きいかを明らかにするために日本人に聴取実験を行った。その結果、「高さ」の影響力が最も大きく、単音よりも韻律の影響力が上回ることが明らかになった。

これらの研究結果から、「高さ」と「長さ」に関わるイントネーションの指導を核に据えて発音指導を試み、その結果から今後の発音指導のあり方を探っていきたい。

## 2. 先行研究

近年、イントネーションをはじめとした韻律の指導方法についてはいくつか研究が行われている。その中で体系だったものとして、松崎・築地・串田・河野（1999）の研究が挙げられる。

松崎ら（1999）は、文型とプロミネンスやイントネーションなどの韻律とに深い関連があることに注目し、初級文型導入と同時に韻律についても指導することを提案している。

例えば、まず、韻律については「句頭のピッチ上昇から次の立て直しにいたるまでの音調のかたまり」を分かりやすく「ヤマ」と呼び、「おはようございます」はヤマ1つ、「京都へ行きます」「明るい部屋」もヤマ1つ、「どうぞよろしくお願いします」はヤマ2つとしている<sup>1)</sup>。

そして、文型と韻律との関係については、「佐藤さんに会います」や「誰に会いますか」はヤマ1つだが、「佐藤さんに会いますか」はヤマ2つになる。なぜなら、答えの「会います／会いません」が聞きたいこと、つまり、佐藤さんに「会いますか／会いませんか」にフォーカスが来るので、「会います」の部分にもう一つヤマができるからだ、というように説明している<sup>2)</sup>。

このようにして、文型と韻律の関係を提示してその規則を理解してもらい、最終的には韻律表示なしでも正しく発音できることを目標にしている。

それでは、実際の授業で、学習者にはどのように発音学習に取り組んでもらったらよいのだろうか。

小河原（1997:93）は「発音矯正が学習者にとって受身的な活動にならないように、学習者自身の発音のあり方を意識的に捉えさせ、学習者の意識の中に正しい発音の『基準』を作らせるような自己評価意識を高める指導が重要となる。」としている。そして適切な自己評価を通して発音を自己修正する「自己モニター」の促進を目指した発音指導を試みている（小河原 1998, 1999）。

具体的には、○×札（評価札）によって、クラス外の学習者の発音を評価したり、学習者同士で相互に発音を評価したりして、自己あるいは学習者間共通の評価基準を作りあげていく作業である。

本稿では、韓国語を母語とする日本語学習者に対し、以上に挙げた指導方法を使い、それについて報告する。そして、その結果から、今後、指導をする上で課題となるものを取り上げる。

## 3. 学習者

今回、発音指導を受けた学習者は5名であり、全員韓国語を母語とする学習者である。5名とも、2000年4月から9月までの半年間、韓国の大学で日本語の授業を受け、初級レベルの内容は一通り

終えた状態で来日した。また、それまで、発音に関する特別な指導は受けてこなかったということである。

#### 4. シラバスの作成

具体的なシラバスをたてる前に、学習者にまとまった文<sup>3)</sup>を読んでもらい、発音面でどんな問題があるか探ってみた。その結果、促音、長音が短すぎる、撥音が後続の母音や半母音にわたる現象がみられたことから、単音の指導もシラバスに取り入れた。以下に、授業内容を示す。

表1 発音指導の授業内容

日付	授業内容
11月8日	拍の概念, 促音
11月15日	撥音
11月29日	長音
12月13日	イントネーション1 ①ヤマについて ②人名のヤマ
12月20日	イントネーション2 ①修飾文のヤマ ②〔修飾+名詞〕+動詞のヤマ
1月17日	イントネーション3 疑問詞疑問文のヤマ
1月24日	イントネーション4 ①NはNです。NがNです。 ②Nは～が, Nは～。
1月31日	イントネーション5 ①今までのまとめ ②長文のヤマ
2月7日	イントネーション6 長文のヤマ
2月14日	イントネーション7 長文のヤマ
2月21日	イントネーション8 長文のヤマ

#### 5. 授業の流れ

##### 5.1. 促音, 撥音, 長音指導における授業の流れ

- ①モデル文の提示
- ②モデル文の音声学的説明
- ③ミニマルペア（単語単位）の聴き取り判断練習
- ④ミニマルペアの一斉リピート。
- ⑤各自で発話練習。
- ⑥1人ずつ発話する。○×の評価札を全員に配り、互いにできているかどうか評価しあう。教師も評価に加わる。×の場合はもう一度繰り返す。（自分なりに基準を作ってみる。）
- ⑦文単位での聴き取り, 一斉リピート。
- ⑧各自で発話練習。→⑥

##### 5.2. イントネーション指導における授業の流れ

- ①モデル文を提示し, ヤマがいくつあるか聞き取る。
- ②モデル文とヤマの数の関係について説明。

- ③モデル文の一斉リピート。
- ④各自で発話練習。
- ⑤1人ずつ発話する。○×の評価札を全員に配り、互いにできているかどうか評価しあう。教師も評価に加わる。×の場合はもう一度繰り返す。(自分なりに基準を作ってみる。)

## 6. 結果

### 6.1. 学習者の発音の問題

評価の際、問題となったのは、以下の発音であった。

- ・促音部分の拍が短くなりがちである。
- ・発音の後続に「ア行、ヤ行、ラ行」が来たときに [n] がリエゾンして、「ナ行、ニヤ行」になってしまう。
- ・語末の長音が抜ける。
- ・「青いネックレスをつけました。」の「～を」の部分や、「たばこの煙に囲まれていると、」の「～と」、他にも「～から」、「～ので」の部分に句末イントネーションが出てしまう。
- ・ピッチを十分下げずに、次の文へ移ってしまう。結果としてヤマの高低差があまりなく、平坦なイントネーションになりがちである。

### 6.2. ×の評価に対し、学習者はどのように発音基準を作ろうとしていたか

- ・撥音では、「たんい (単位)」が「たんに」となってしまうところを、「たん・い」のように少し間を置くという方略を使って発音していた。
- ・句末イントネーションが出てしまう場面では、「早口」にして句末イントネーションが現れる前に言いきってしまおうとしていた。
- ・高低差をつけるために、高くすべき部分を伸ばして言ったり、強く言ったりしていた。
- ・ヤマを指でなぞりながら、発話した。

### 6.3. 学習者の方略によって改善が見られた点

- ・「たん・い」のように少し間をおいて発音すると、「に」にならず正しく発音できていた。しかし、自然に早く言おうとすると「に」に近い音が出る。
- ・ヤマを指でなぞりながら、発話したときには、5人中4人がヤマを作って発話していた。しかし次の週には、5人中3人が、文末ではピッチを十分下げてヤマが作れるものの、句末でピッチが下がらずうまく行かなかった。その後も、できたりできなかつたりとゆれが続いた。

### 6.4. 評価はできても、発音ができない

学習者同士でイントネーションを評価した際、高低差があまりない平坦なイントネーションだと、×の評価が出る。しかし、その×の評価を出した人自身が発音するとなると、なかなか高低差をつけて言うことができない。つまり、高低差が聞き取れていても、発音ができないということが5人中4人にみられた。自分でもできなかつたことがすぐ分かるようで、発音した直後に、悔しそうな様子を見せていた。

## 7. まとめと課題

本稿では、イントネーション指導を軸にしたシラバスにもとづき、評価札を用いた発音指導について報告を行った。その結果、学習者は自己モニターによって、発音基準作りのためにさまざまな方略を考えるということが分かった。このような方略をお互いに出しあい、取り込んでいくことによって、自律的な発音学習ができると考えられる。教師は、学習者が出した方略をその場限りにさせずに、さらに効果的に使える方向へと導いていくことが、その役割として求められるのではないだろうか。

また、今回、イントネーションの指導を中心に行ったが、この中で特に問題になったのは「高低差をいかにつけるか」ということであった。高低差があまりないゆえに、ヤマの形にならず、平坦なイントネーションになりがちであった。ヤマを作ることが日本語のイントネーションの基本であることを考えれば、この「高低差をつける」練習が特に必要になってくるのではないかと思う。

「高低差をつける」方法として、自分の声を録音し、発音を聴覚で確認する作業や、視覚によるフィードバックが考えられる。「高低差の聴き取りはできても、発音はできない」という結果から考えられるように、学習者は自分でヤマができているか、平坦かは判断できるようである。そこで、自分の発音をテープに録音して確認する練習を取り入れたらどうだろうか。比較対照として、日本語母語話者の発音もあるとよいだろう。

もう一つの視覚によるフィードバックは、自分の発音した声をコンピューターに取り込み、ピッチ曲線を見るというものである。日本語母語話者のピッチ曲線と比較すれば、どの程度まで上げれば（また、下げれば）よいか、その基準がつかみやすいのではないかと思うからである。

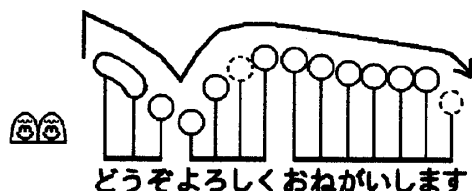
発音指導を授業の一部として、毎回取り入れたのは筆者にとって今回が初めてであったが、この授業を通し、今後の参考になる点がいくつか得られた。これらのことをふまえ、今後も発音指導を続けていきたいと思う。

### 謝辞

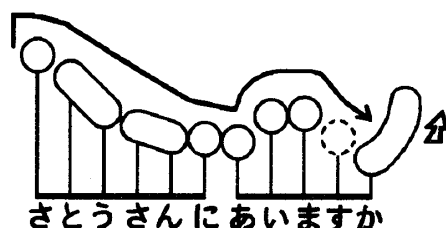
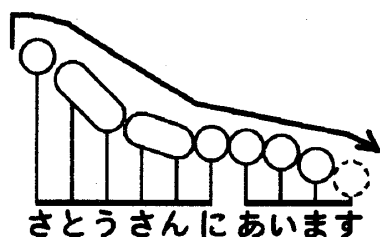
今回の発音指導を行うにあたり、橋本慎吾先生には貴重なご意見を数多くいただきました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

### 注

- 1) 松崎ら (1999) は韻律の提示をするのに、以下のようなプロソディーグラフを用いている。



- 2) 以下のように「佐藤さんに会います」はヤマ1つ、「佐藤さんに会いますか」はヤマ2つになる。



- 3) 以下の文を、シラバスをたてる前に読んでもらった。

「みなさん、はじめまして。私は韓国の\_\_\_\_\_です。今年3月に高校を卒業して、半年韓国で日本語を勉強して、○月○日に日本へ来ました。来年4月から○○で勉強する予定です。高校ではサッカーをしていたので、サッカーが大好きです。一緒にサッカーをしてくれる人を探しています。ぜひ一緒にサッカーをしませんか。他に、せっかく日本に来たんですから、あちこち旅行したいと思っています。」

#### 参考文献

- 大山玄・三浦一郎 (1990) 「日本語学習者のプロソディーに関する研究」『日本語音声研究成果報告書』3, pp.98 - 101
- 小河原義朗 (1997) 「発音矯正場面における学習者の発音と聴き取りの関係について」『日本語教育』92号 pp.83 - 94
- (1998) 「評価札を用いた発音指導の試みー自己モニターの促進を目指してー」『平成10年度日本語教育学会第6回研究集会予稿集』
- (1999) 「発音学習に関するストラテジーとその教育への応用」第1回日本語音声教育方法研究会資料
- (2001) 「日本語非母語話者の話す日本語に対する日本人の評価意識ー日本語教育における言語意識ー」『日本語学』7月号 vol.20 明治書院 pp.64 - 73
- 小寺里香・野原美和子・袴田麻里 (2001) 「学習者の独話に対する評価の視点ー初級学習者のスピーチの場合ー」『南山日本語教育』第8号 pp.123 - 143
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育5号』国際交流基金 pp.139 - 154
- 谷口聡人 (1991) 「音声教育の現状と問題点」『シンポジウム日本語音声教育』凡人社 pp.20 - 25
- 関光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴と日本語話者による評価」『日本語教育』68号 pp.175 - 190
- 松崎寛・築地伸美・串田真知子・河野俊之 (1999) 「プロソディーグラフを用いた日本語音声教育ー韻律指導用カリキュラムについてー」第1回日本語音声教育方法研究会資料
- 三浦香苗・深澤のぞみ (1998) 「留学生の口頭発表に対する評価を探るー本当に伝えたいことが伝わるためには何が必要かー」『金沢大学留学生センター紀要』第1号 pp.1 - 16

## 資料

授業で用いた配付資料

### はつおん 撥音

- 1 テープを聞いてください。この2つの文は何が違いますか。
- 2 テープを聞いて、下線に書いてください。また、その言葉を下から選んでください。

a \_\_\_\_\_ b \_\_\_\_\_  
c \_\_\_\_\_ d \_\_\_\_\_  
e \_\_\_\_\_ f \_\_\_\_\_  
g \_\_\_\_\_ h \_\_\_\_\_  
i \_\_\_\_\_ j \_\_\_\_\_

- ①かばん ②課題 ③元気 ④劇 ⑤しわ ⑥近畿 ⑦あんまん ⑧看板  
⑨診察 ⑩進化 ⑪感知 ⑫危機 ⑬神話 ⑭価値 ⑮進路 ⑯視察  
⑰歯科 ⑱白 ⑲寛大 ⑳あんま

- 3 正しい発音はどちらですか。

- a 信頼 (しんない・しんらい) 反乱 (はんなん・はんらん)  
b 心理 (しんり・しんに) 管理 (かんに・かんり) 電力 (でんによく・でんりよく)  
c 親類 (しんにゆい・しんるい)  
d 洗礼 (せんねい・せんれい)  
e 親愛 (しんない・しんあい) 弾圧 (たんあつ・だんあつ・たんなつ・だんなつ)  
f 順位 (じゅんに・じゅんい) 単位 (たんに・たんい)  
満員 (まんにん・まんいん) 原因 (げんにん・げんいん)  
g 金運 (きんうん・きんぬん)  
h 千円 (せんねん・せんえん)  
i 千円を (せんねんの・せんねんを・せんえんを)  
j 婚約 (こんやく・こんにやく)  
k 親友 (しんゆう・しんにゆう) 原油 (げんにゆ・げんゆ)  
l 金曜 (きんによう・きんよう) 信用 (しんによう・しんよう)

- 4 次の文をテープで聞いて、発音してください。

- a タイのお金の単位は「パーツ」です。  
b その金歯、牙みたいに光ってこわいですよ。  
c この金魚、とても貴重なので持ち運ぶのに緊張した。  
d 日本語で肝心なのは、漢字をおぼえることだ。



日本語のイントネーション 3

1) 一番知りたい部分にやまがあります。

a Q: だれにあいますか。

A: キムさんにあいます。

b Q: キムさんにあいますか。

A: はい。キムさんにあいます。

2) 次の文にはやまがいくつありますか。

a なにか のみますか。

b なにを のみますか。

c だれか きたのですか。

d だれが きたのですか。

3) ( ) の部分は聞こえません。イントネーションを聞いて、( ) の部分を推測して選択してください。

a ①どこ ( か ・ を ) さんぽしますか。

②どこ ( か ・ を ) さんぽしますか。

b ①いつ ( か ・ に ) しますか。

②いつ ( か ・ に ) しますか。

4) 次の Q & A は、どんなイントネーションで発音したらいいですか。

a Q: どこへいきますか。

A: きょうとへいきます。

b Q: どこかいきますか。

A: はい。いきます。

c Q: なにかかいましたか。

A: はい。かいました。

d Q: なにをかいましたか。

A: やさいをかいました。

(『日本語の発音教室 理論と練習』田中真一・窪蘭晴夫 くろしお出版 より一部引用)